北越奇談

五

ル 4
4231
5

門 九 4
號 4231
卷 5

北越奇談巻之五

北越 崑崙橋茂世述
東都 柳亭種彦校合

怪談

葛塚へ七十年前沼草原ゆゑ[illegible]と開発して今百姓[illegible]百町歩田畑高ぶ廣闊なり 爰に辻番左市といふもの娘一人のるのくにしく家多く貧人農夫[illegible]町の番より出て曉まぐ不歸一日畑に出て草[illegible]村[illegible]ゐるに忽土中[illegible]ゐ[illegible]ぞ[illegible]居[illegible]るなり怪[illegible]くありて[illegible]が大サ小田原挑灯の[illegible]蟶蟲

早稲田大學圖書館
第30.1.18號
藏書

ひとつまろび出しうの口漁をうつて其頭をうつて
金鉄のごゝ依て吸居る烟草の吹がゝ刺おの虫乃嚙り
る所に甲ゝせび虫なる式痛うく九く苦る成又吹がゝ
を数十落ゝたれば終に焼死をせる所の男の辻の番
に出ゝ居ゝぞ娘一人茅屋に臥ゝ居ゝ怠ゝ大乃
ごきめ枕のかゝるにけごうもめくゝ如しうごくを女
ゝ紀上りゝたれば更に一物すめるゝ邑眠ゝくゝれば又
式女家に居ゝるゝめゝゝど即番小屋に出ゝ父に告ぐ
父ゝつゝ兄を伺を女家に入れば又式奇化物きゝり
おどうゝをゝを数日絶に奇病に悩ゝ法華を

読誦ゝゝく式怪止ゝぬめゝゝもべゝ猴虫と入ゝを数百案乃
の其死亡妖怪をうゝをゝ式

其二

浦原郡旭村より五泉の方へ紙ゝ舟山中に三五ヶ所池ゝ入
り式池に去四尺ばかりなる蛤蚧ありゝ夏日晴天静なる
ゝゝ必水上に浮び出ゝ又論所村古阿賀川に五尺ばかり
の蛤蚧あり日中田間人なき沢密に堤の陰にたゝゝ窟び
ゝるゝゝ必ゝ浮ゝ出ゝ其背紅黒に顔の下朱のごし
里人ゝゝゝ見を見るゝゝ蝮蛇なりとして毒ゝ病ぬ
又ゝ峯村に泥鰌池ゝいゝるあり日後門窟の中に泥鰌池と

ゆくのうく其ところ所ごとに七二三尺ばかり一尺ばかりなる
へ甚ぐ多く無れども池中泥沙くくに人ふれが皆かくゆく
にふれるとめるこのごとくうて可備一把の葱白に和しく
見を煮て以三杯を傾けばゆるるの式

其三

西川曽根といふる所町うち窪なる池に茎わくくに式拾く
数十年掃除も用ひざるに一ゝせ六月梅雨しく おもむく
暑き夜まの白の光のるめるにあつ流這まいかり人
くめてしつ大勢挑灯るど照しめるまくく見をふれば
七二尺ばかりなる蚯蚓なりし是をもくく按れば西四丈

の奇も真なるべきも
蚯蚓の吟ごとるの唐山の書にも又くく歌女の絲あり夏月
淋雨ぬんとしとり沈庭除濕泥などのごとり土中に吟じく
その声清察しり予も花を按ずるに諸虫の吟ごるもの
皆羽ありその羽を鼓して声を出そもなり又口吉ゑ
へ勿論なり沈ぞ蚯蚓のく羽有るくくく仏吟式ゆくんや
見必蟋蟀の吟をめるくく蚯蚓くくなるめるん蚯
蟀りて其居る所おのおの依く上古正恩の者土中に吟
めるに探りしくく以蛙のごとくにげ去るるを蚯蚓の
吟に拙れるを見て是となせるなるん武人の曰蚯蚓のと

蝗蝶の吟とゝ別青なりとゝいへれど是ハ妄説なること明らかなり
只蚱蜢口ゝきにくゝ頭のさま〻式用ゝくゝ水垢ゝ苦
なと又ゝあり
又田螺ゝるくゝといへるゝ俳諧李節などにも夏の季ゝ
發句もあり田農俗ゝ是を以早夏雪消より耘耕乃
比まで田間常に其季を歩くゝいへども必ず用ひざれば
その位あるゝ式知ゝ予ゝ夏頭堵に有りゝ
ゝ其田螺なるゝ式歩さんとすれば耳を傾
るに古居ゝ加良ゝこの季寂寥ゝかの長安乃鼓吹
に対ざるべゝ 実ゝ一絶を新製ゝ

田間水足事春耕風暖黄苗半寸生弦月
濛朧倉雨夕巡畴静聽蝸贏鳴
本草ゝ田螺蝸贏ノ二品とめぐ蝸贏ハ蓋なゝ只農俗
云田にゝふたゝきあるゝ式ゝ呼ゝとゝいへり依て此詩調を賦
ゝ以いさゝか其田家春夜の情式述るゝといへども予密
に考るに田螺よゝく此声をなすものいなれゝ即田畦に生
て静にひとり其季に付ゝく探りはるに田螺蝸贏三ツ四
りとゝ見を流盤中ゝ入ゝ庭前ゝ置ゝく以試るゝ
終夜竟に不鳴翌夜又かの田畦に出ゝく歩れ即声のり予
ねゝたゝねゝむれども田螺ゝ予ゝ手ゝ杖ゝ以て畦を

折べ忽土中より白きこたる小蛙一ツ飛出こと即俗に石
地といふものなり是を石く池中に放て夜たちまち声色
く田鳴に異なることなし蚯蚓の説おほけ以可一矣
越国の俗説に河鹿土中に鳴くこと三年にして其堤
崩るといふ河鹿其形鯰魚に似て小なるもの一二寸大
なるも四五寸に不過色赤多麻に似たれば河麻といふなる
べし是も又前の二説に類して小魚の鳴く理なしと
いとども予いまだ不試公魚常に山上に不深砂石につきく
めそぶ或い水中土穴に住む鬚あり尾中針ありて人を刺
急れば堤の下なども自然にうごく小球ふくこと空所あるゆへ

以公魚あつまり住て其夢をなせるゑ予が郷本より八国
常に洪水をうれひの用をなすと殊に信川の水流両岸に付
て数百邑里年〻水を愁ふを若干ぐ是を防ぐの費幾
千万ぞやたりといとども大河一たび溢るゝときは千日の苦
辛忽あだごとなりて百尺の堤只一蟻穴より破るが如
其水流のおもむく所林木をぬき村屋をかたぶけ数十里
の平田只泥海とうるゝ稲粱のごとくいつもさうなり
是ゆゑに吉米一粒の食に当べきあるゝ故に両毛
うち續年に飢民寝席をわすれるとめぐること国乃
あるり是を見るに人雖ゑ愁となること我ひとりや或人乃云

今の世に禹王のごとく治水四の下民に災をなさしめざるべしと
予笑て曰不然上古の水を治る民は分国の広ぎなく
河水溢れども今時のごとく堤の防ぎなく其水のおし
ひく所屋宇漂ひ人をなせども正恩の民を救ひ給ふの
術なし故に禹王その水脈をたづね地理のよろしきに随ひ
流をうちびくのなり今の世人是を補ふの奇術あるべし
その南によろしきに其北にそりあり其西をなだむれば東
又不従なもの四方のうしきをなる人ありとも今時の人情
只己に勝まる我情に其下風にしたがはんと恥るゆえに事
をたとく禹王在とはいえども其術をおこなはん予が

四方水寇をふせぐ方に是富饒の地なるべし

其四

漆千杯朱千盃黄金千両朝日映夕日暉有三梨樹下
古碑他邦にもまれなる予が国に三ヶ所あり其一は国衆
の下釜ヶ谷村観音其二は新発田より南牧山薬師其三村
上関谷桂村なり其里俗ものいふ古碑をつのりて
むかし長者某黄金ホを土中に埋り此碑を立と今
其所在を失しく尋ねもとめるにようなる是と思ふ
人多くこれをめぐりて中古いにしへの好事の人
人多く歌作をなしく衆人のまこびを記さしめけん是

かゝるを裕家の僧乃あるを所なるべし只二ヶ所の中其一所
へ碑を建てゝ実に〳〵其余の下臣の人義を忘れざるべ
に此り我郷にもめしなんどゝいひて碑の名を作る
なるべし予密に此句を考るに漆に黒ずいに北と色朱に
赤とゝもゝく南とゝ金に黄なる故以中央 下〻朝田を東
に〳〵夕日に西なり梨樹に和剛〳〵ゝ〳〵とゝ是即東西
南北中央とも に一物なりとゝいへ共なるべし謀に可一笑とも
とゝもゝく是を乃ち黄金に実に得難きものゝ仏氏二語
怪すべきものゝ也予が国民間下臣の事他邦の人に対
〳〵是ホの語ゝ〳〵我国風俗淡んとを恥べきの

なり只他邦の人を下臣に信とゝべし中智にそゝとゝべし上智に
心祝に笑ゝ罷ノ

其五

新保に泥亀を料理家業とゝ亀六とゝるあり
元諸江河より買めゝ色を切り四〻救百なり亀六
今己に五十才にゝりゝく元力正に衰ひゝるに及び一夜
思才をゝく寒ゝ水に入ゝるゝ戦慄〳〵ゝ声を
めゝゝゝど漸ゝゝ成りゝゝくめゝゝをさゝり見れば救百の
泥亀夜着の人にかゝるゝ頸のもとにのゝまりゝる者
きゝゝ叫ぶ女房起めゝ仍ゝとゝ問亀六目を開

多葉粉末
すぼん

亀六泥亀ノ
怪を見て
潜と帰る

これをうれば一物なし〜それより疫く苦しみ眠んとすれ
べ即泥塗身辺にのつまり来る爰に其罪を悔て借ものなりぬ

其六

池の塘に有き石地蔵あり村の若者ともこれをまるくこゝ上
て各その力とくらべ終にのやまつく地に落し地蔵乃頭より
分て村の老婆どもあつまりて是を嘆きその
頭のくだくを代合せ仏堂を建て祭る一年のまつりに
其欠りたるのどく付今なほ地蔵尽
験をあらはす若人あつく瘧を病時は細縄五尺ともち
く地蔵の前にいたり縄にくゝりの地蔵ともどり祝〜く曰地

蔵能救人病苦死くへはづ瘧を截る瘧はつるとゝ可試
物なり瘧不落則此縄を不解即翌日其瘧かげもなく落
なり石の地蔵灵あらく人の願成ゆるゝ瘧の小鬼地蔵の供
物を貪んとてくゝ去りぶ〜
信川のほとり裏與野村社地の中に石一ツあり大サ尺斗り
なれども人ちぎ事なく流罪なりし小児ホ戯まに其石を以堰ゝ
中に投ぶれば翌朝即元の所にあゞる幾度びとも又かくのど
其堰泥水流くゝ中くゝ一人の力にくゝ取揚がたき所
ゝとものやしもべ

其七

茨曽根永安禅寺に一ときせ近村より幸子一人伴ひ来り
まなびし扨後ねんど教へのうべしと和尚に新しきこと
その者の祖母なるあの人く情こもりく三日に一度も
必ず来りその安否を問へば其の夏より頃の熱に
時ときどく来り坊ざるとき十日あまり和尚たしめ堂中
ちなを見をあやしきかの者に戦きく汝が祖母已に死しる
べし必ず汝が方へ来る魂のあるべきなりとあがり
く堂上に打寄月に向く涼み居りが二更の頃忽山門の
外にて人の徘徊するかげ見えく石径を登りちづに
立ちきるあのりくく見てしかの者が祖母なり

つれも男れしるさなにく鉢れをぶり去地獄の前に暗く
休居しが又そなく庫裏のかへあるく来る忽犬見をみて
ちくうりに吠くく不止爰に祖母即路ばかりくちづふ
立ちるさなり和尚見てあくく曰祖母此夜中にるくの
所と来りなぶる犬と思れく吠るとあくより走り出て犬を
追べしと即人く走り出犬にあり出の其祖母をたぶれ
ど終に行方知ずと和尚怪しく翌日幸子をお使ひ
く其家に行向へに祖母病で不起て十日あまりなりを
童子をつく大によろこび云我昨夜夢に汝をたぶねり
しが犬のぶるがおそれさふ寺へ入りかなる中養先ようと

あがるまり

其八

魚沼郡何某業の家に女房並小児一人を家に残し雲武に出かせぎ有しが女房不仕合打つづき家に居ることあるべからざる已に三年を歴れども音信絶てなしけれども自らひらく囲に汚れ妻子も今は我を忘れかぎり他の家に嫁せしなりと決して裏店のかたすみなる呼代借居しまく其冬あるべき妻と迎ひけるぶあるる夜忽囲に物せしに本妻きたりて枕のもとに立てりかの男驚きまく見るに眼口鼻ひらり暗夜とて顔色分明ならざれども怒れるありさま身の毛よだちまくおれ

声を出さんとすれども不能即かの化物のごとく夫婦ぶ驚とふぎ引めげーゞアット声を出さんとすれば怒ればくのとなくうつ伏耳ーー髪のあくつくく痛くく終に夫婦ともに髪ぬけくく已に半を減ぜ其妻是を愁ーー去彼写も又苦悩のあまり信ようくく諸囲に順礼ーー夫仏に詣ーーぶぐ七年ようやくに本囲に帰りこぶむらの家に帰り密に其ようすを窺ひしれば一人の女衣を洗く井のもとにあり家の内を覗けば十才ばかりの童三四人戯きめそぶかの男おりひらく是いとうくく人ら我家を買ひて住ーーんとく喧ーーく已に近付ようく衣を洗女の後にさて法謝を乞ふかの女のとくうもきさる顔をとれば己が本ら

小女乃夢竟
蛇と化して
衆人を
驚ろ

妻なりあまりに打ちなきあれども いろぞ色これが女ふたり
さうに色のぐりとくりとれば夫なりれに起きさく其ゆくと
同じ其妻なる者八十年の矣苦戒を不厭負とやり一ふを
養育しく文に眠る所をしそ見又いつなる奇怪ぞや

其九

地蔵堂何某の娘久しく病く不起近隣友の娘ども来乃
こしでめこく大勢お招く料理沢ぐ振舞けるにかの娘も
其使ひとりこちまりに行んこれ欲れしど病中なれたこく
父母これとゆるさどかの娘法く不止強に眠まり起振舞
の家にに大勢の女老若ら交て或に強ひ或に踊琴よこ味

線よりく笑ひさざめきけるに忽家ひしくゆたくく二階に
上ろり大サ一尺まりの黄なる蛇の頭もくさしを
踊動ふるふ其蛇己に去ってのちなりなんと
しそ夜の内に止に多り女彼病る娘翌朝人に法くこ我
昨夜夢に振舞の家にゆきくのれ人あり坐敷の座ある
青せしゆ人窺にさしのぞきこれば背の元が立隆ぐ故
終ありうきさ夢の覚てうしおがこと

其十

機谷村百姓某兄弟二人ろしく秋東武に行くこセーが夷

には入り農事なればいとまなきころゆへ必回に帰るべしと同郷の友に
約せりきたるに其なる者病にふしてかへることあたはざる
をわれ後より帰るべしと知る人に看病を頼みて先へかへる
者は同台の友一両人同じく帰りけるが已に我家に近づくべき
日に至り朝より赤き衣の若き者が一丁ばかり先に立て
行或は見え或は見えずして是を追ひゆくに終に家の中へ入に
連れはかの者一走にして内へ飛び入ぬ家人皆驚きて立騒ぐ
其者又行所を知らず見れば又弟につゞきて内に入しかば父母悦
びとくまへいづれしと問即告るに病める者を以東武に残せしと彼
る父母大に嘆くに赤き衣の怪は其死せるならんとて急ぎ人を
東武につかはして其安否を問しむるに其病愈て其人と
共に帰り来りける又奇なるかな凡近世流行の戯作復讐言老
数百編おほく死霊の怪なきはあらず又古より幽霊の話は
多くあることなれども信じがたし豈陰陽人に
向く形を顕し能言語をなすと云ことや爰に於く手足
とし只目のあたり見る所生霊夢想の話の如く記す

其十一

神は人の敬するによつて其威力を益といへり実に言る在
んか爰に假設齋といへる豪富の人あり数世の後家勢次
第に衰微して産業正に乱んとす爰に於て假設齋色

し当国一ノ宮伊夜日子明神に百日素麺しく家勢を
中興せんと祈るに百日の祈願已に満ぬれども夜叉
とも〻〻幻とも〻なく環鬢端正の童子一人枕の上に立
かの假設社に告く曰汝丹精をぬきんく家を興すべけれ祈
と尤愛憐とる所なり然るに汝が家従来耕田百
に余る所又是をつんとむる色汝が家従来耕田百
余石蒼頭奴婢百余人貢納の小民一千余家依然として
旨食を人〻然るに近世の風俗上の好所下必是を学ぶ
のゆゑに衣服器財の華美飲食の珍味異国山海を尽して
はる所なきゆゑ其主已に酒食に耽り妻に耽り是

汝が衰の一なり家僕又是に效ひ間をぬき勤をなすべきを好ん
所の扶持は年の費に不満是又汝が衰の二なり地を借て
耕しの小民自然に又其奢を学んくづく転耕をなく
僕をかゝへ人を雇ふく是をたゞく少く得る所少く貢納の時
に臨くく又是を減少するに年の災異を名として是又汝が
衰の三なり故に上費多く下収る事小を以上へ下を責掠め
下は上をうらみ恨む今此三ノ衰又改むるにしくなし
又いんとむるとも已只汝が不徳をくめ只世の盛衰を慎む
べし其吉凶はあざなへる縄のごとく禍福必双連とも言竟
く無忽見ぬこゝに假設社感涙止めがたくもとゞく神殿を

假設氏
大樹の下に
やどりて
神人ら
物語りを
ず

之生家に帰らんとするに夜いまだ明ざるに出ぬ
わづに山路失し林に分入ゐづくとなくたどりけるに忽
然と大樹下に一小社あるを假設設ひらく仏とまろ
玲瓏天明くゆるぐと即小社を拜し大樹のもとに立て
憩くたどり息し折ふし忽衰のかさに清麗なる豊の音し
くるに糸来るあり假設形霸に見を寄ひろんで白衣
高冠の神人已に小社の前に来くるより下即ゆく曰忌神
内にありやと爰に又小社の中より松姿雅髪兼服葛巾乃
神人出く大樹の南に坐し白衣の神人も即樹下の北に坐
り葛巾の神問て曰公今ゆくより来にるや白衣の神答て曰

吾今夜一ノ宮内殿勤番にお出く今正に帰んとて葛巾の曰
仏の珍事ある白衣の曰假設氏産業の衰とりく中興
せんと祈る然りとて世の盛衰神力の及ぶ所に
ふしなり葛巾の曰公ホ仏ぞ告るに齊家の御をり
ちざる白衣笑て曰治国齊家は上古の聖賢ざる皆能
ふ況や女ぞ貧窮仏の説所めくくる仏言ふとや葛巾懐
然と答く曰公不神ゆや驥弱は疲くに馬所見を渉り
名士は其貧なるに成りて吏部郎見を過るとて我今
一二を述んに曰齊家の御其時により其所により其風俗より
く切計を施べし上古の地は廣く民服に琴を考べて囲

治る蕭何は刑を三章にちぢめ諸葛は刑を六條に增是皆
其世と時と風俗とより我今假設氏が爲に邑を討んに
只富を用べし即是近世の風俗にしたがへりと白衣又
大に笑て曰汝今富といへども其富得べくんば假設氏万石
の田數十の僕一千の小民以富を競しとんや富実に仍縻
汝邑をいんがせん葛巾の曰富ぞ安しとつゝも其道を
もつゝせどんば陳るに豈及んや古人いつるこゝあり農は不如
工工は不如商と其陶朱公白圭子貢が富其道を得る
より其余有今數千の商其道を得る者少なりも一ぶび
其及をうべ家勢忽盛にしく恩沢奴僕までにおよぶ氏

小民も又貢の責をまぬかるゝ式仍く縣已にゆるなるべし
弱邑ゆるなる則は小民却のづから上を愛ぶに於て上下和之
故に不謂や人富ぞ仁義是るゝと白衣又勃然としく怒て曰
汝もゝも其富といるゝの術めゝば仍ぞ一小社の中に寓一
ゝ人の邑を祭るゝなく祈に強めるゝなきゝ安んぞや葛
巾の曰斡信漂母に食を求めしゝ元帥とゝる
に忘ゝく智あるゝめゝぞ呂商は年八旬に滿て一鄙之安ぶ
恩をかゝ也るゝめゝどゝいへども其用る所に及んでは天
下只一智なり是用る人なきゝ其智の絶を所めゝざる
をもゝくなり神力は只人の獻をるによる吾はいまゝその獻

る人を不法と云て忽小社の中に入
ると見えしが二神めく〳〵なく飛去る林風只蕭颯たる紙衾
のみと誅に成一の小児のむしり拔給紙衾がどしと入た神四の
奇今粉灵詭の明らかなるとは成山平呂を以按ずるに富をそれ
雖く〳〵又安きを先年平賀源内といつる奇才あるし皆
人の知る所なれども平賀常ぐ人に對し〳〵万のこと分別
の知を用るに只富をいつてとく尤安〳〵といつる紙衾アさを在
人ら為うと人こそ人各其分量をわつく百渉のちく〳〵百渉の
富をなすに不足千錢のかゝ千錢の富をなすに不足平弱
財のまろ相法を少〳〵学びそく今呂を按ずるに下渉の奴僕

たるもく貴相のあるとめうとく〳〵ど呂則奴僕中に〳〵そ貴と
なるのこと又貧困乞食の生まれに福相のあり呂又貧
中の福を以るものにそいつあるを怒るに麒麟の一毛なるも
なり毛皆を分量のある所に〳〵百渉の分量岩〳〵千金
の富をうとこと成はんや平賀氏とぐめ家貧にして泊中の
智をつくせど不能一日東武に拔ぐく富家に対と貴人と
をおむ其給銀凡十八年日二年と限ると諸家皆不肯
依て京師に生るとい人どもを始終に去く浪華に生即始
のこと成以諸家にやとを変に某の豪富其初の奇なる成以呂
をいるし即給銀十八年日をあつふ時に平賀氏これを以て

随意に於行漫與〳〵丈に家事を勤ざること二年一日忽然
て主人に告て曰君が知遇の恩今正に報ぜんとすと実に於て
南りのと忽其利三千金以主人に呈〳〵去て行て深に
平賀氏の一大奇智なり以因にあぐ

其十二

蒲原郡押付村に灵験いちじるき稲荷明神あり社地を
即西川堤の下百姓吉右衛門といふる者の建立せる所の社殿
の下に住居せる穴あり常に小狐出て〳〵あそび戯れ居
人どもを恐ること大なれども毫も不追放祈願
ある人は其社前に行て小豆の飯油煮の豆腐を例供物と

なすべきなり扨社頭を拝するに所願成就
就てべきに必其供物を食ひつくし不成の班に一つも食せる
こと〳〵是亦一奇なり別して盗賊のうばい失へる物を祈るに
十に七八は不出といふことなし此外先祖吉右衛門といふ
百二十年前のことなるべし妻の寄なりし畑に出て
蓑笠をかぶりにぬき捨ひとり前づり耕しけるに
るともなく尾と頭と半分き老狐分をひそかに走り来る
あり吉右衛門驚きこれかつてびたなる驚に一ツ前をつくに
飛来るあり中にうちかの老狐吉右衛門つぶ捨置る蓑笠の
下に身をかくせりかるれども田畑にもぐり居れる者共

三四人それ狐よろこび歓躍あんとすかげ追ひまはるにぞかの歓こび狐をぶたひぬ其人この降ぎにや祭きけん逆乃天外に老ぎつう如若者どもあつまりかの老狐を殺さんことを吉右衛門ひそかに見を惜み酒一斗を物してつるに四人を誘ひ即かの老狐を襲ひつゝ己が家に帰りて食わなどめこれに代老狐吉右衛門が傍をうかがひ奇を設こゝ衆人乃囲をおどろかして一身吉右衛門家貧にして味噌の大豆を煮ることあるとき家内以見を魅ましたるに狐紀生くれば味噌大豆残なく尤めつるあの中にこゝろくうり吉右衛門おもふ近隣に告ちひろに村の寺にて煮てくる味噌

おもふ吉右衛門大に怒り見咎老狐の業うらんとかの老狐に向ひ寺へ返ちべしとつりけきべ又其夜のうちにおくくまびに返しぬ其余吉右衛門深のこゝろて失に勝さる話三四件にて盗人自無に術をひく盗紙四五人と打ふせさる話狐老狐の利強なること稚く寺法ありとゝ人ぶす事也き紙もんく見を器を甚長稲荷大明神と祭なりく四人の者信又少かぞ

其十三

新深砂山の間にまた山狐とゝく人に妖をなすこと勝きく奇法おろく名よあゝ老狐あり家に赤沙日[redacted]とつるこころの

青山乃老狐
村長茂次右衛門を
あざむく

村長何某なる者一とせ夏の末つ方新潟に公用の帰るさ
砂山を通りかの芝山にかゝりし折ハ昼なるにはく暑さ堪がたく
少しの木蔭にやすらひ彼狐の臥するを見つけ早速村に小
便しけるが狐驚きて走り出あと戌をふりかへりて立けるハ
何某ちかう大に打どろき扨ハ彼名にあふ妖狐なるべきと顔相
なる事を仕出したるものかなと後悔し狐に向て口けるを顧
じめく其許の昼寝しまへる所をもさらで粗忽に小便しぬ
驚しゆたなる事定て腹立なさるべけれど此方にも心ゆかく
しらざるより起しことなれバかならず恨のへべからずかまへ
じく我を妖しまへなナド返辞もせず悪気施つあとに付て行

されば彼狐立止りあと振かへりつゝありけるが路の傍なる地蔵
の立せるかげにかくれまがく其地蔵を背に負ひ草むらに
つらしく立かへれハ忽女の小児を負ひ手に風呂敷下げたる
に妖けり何某ハ大に驚き声をかけ扨く狐よのくおのれ並
のかぶかも大らんど先刻よりおんこび中通りあかくのかくされ入
らぞや必く我を迷しまへなしと言ひべかの女わらひ申すさ此方
人の我をいかやいがいに此先の村より新潟へ一縁づき
さる者にて只今親里へ帰るにはあまりにおそきと宮参りや
ナド打笑ひて小児の泣をゆすりく先に立て行何某ひとつ金
気味あしくおもひながら何のいかにもなく跡に付てゆく

わどれてこゝなく日の暮かゝりく湖く一ツの村をしたゝれ
いかの女主従ツ薮沢方ついむらひ和と此家が私の宅にい
見付くゝ別かべ〜日ものれさきに早くかそうのへ〜とつひ
捨内へ入ぬ内に此男女のこゝろ〜く中主娘よ今きそうこう此
ひろうそこかくと待てしるそ孫に成人せ〜なぞ四くよ
笑ひ語くくさ〜に親へべくものあ〜ざる秋宝と子安方ろ
ものひろこに和と不忍手なるこかの狐我どこそ妖〜
待べきれこゝろざる此家内を迷〜ゆるとよ仇にもせよ
此と主人に知らせどやとこひ門にたゝそし内のやうを此家
ひ居る所に家のあはしもべくく年沢五十ばかりの男なか

用あるさ又くく門へ出ようねきて傍へいてこひ和只人
此内へ入ひ女へ真の人にくくこれ白今日かやうくのことにくまを山
の狐石地蔵え背負くく女に女さくく必く油断のこにくヤー
けまこそ主人の外奥をさはし和くあのやきこ代ヤヤとかる
あの女ハ拙者ら娘にくく去年野沢人縁付当夏孫も出来され
ハ連来りこれ生よびとおくく言伝て泊く只今来れるこ
ゆそ狐にそひこえや薮沢方ら又云こゝそ日のあこう彼狐
ら妖こうこ代又こくこに付くく来こゝそやあたくく娘子の為
りへけを狐に食れ申ヨナド言つのりけきべ主さこべ疑し
所ゑ〜見トの方よこゝ必ものでし出来ると窮こまこく

のうとゝ式示一合せ内に入〻く俄に火をさゝんに焚き抱をゝ
いつぐ彼女をそゝひるもれ冥れもち来り猛火の上に尻を焙
れい女へるく法叫び母と祖母とゝ立踏ぐさ仏ぐ式をるぞゝ
おゝきけべれども男ホへ天に歩つまぐ今に尾をいぐ〻く
ゝせんぐるぞすぐちきりにあぶるわぐに終ホ若ーゝく死
ゝう然ども天に尾を出さぐ和へ其曲者ゆるゝるく門よ
寂ひ居ゝる為ひちつをゝひるもひたるもホにちゝあけ組合
村出にゝけ夫ゝう領主へ拾ひ出諸役人立合吟味白状四
湖の上へゝく終に川原へ引出され首をホト打落ーぬ和
ち為ひちへ首打落れ歩ゝまなくうつゝまなく泥ゝる

乃示のものぐゝ所に出ゝう為ひちつおひらく和へ見ぐあの
冥土黄泉の旅ゝ仏所なるべ〻仏率ゝく極楽の庭に居ね
あゝゝぐやゝと見にまゝぜく仏ぐに仏弟仏落ゆゝく逆に
袖の為吟へけまゝ和ゝゝ極楽お程近ゝゝ見ゝゝ一時ゝまく
ゆゝぐやゝと袖の為ゝゝちゝべにたぐゝ付ゝれば細き流に橋ありて
大なる精舎乃堂上に読経の為ノ中ゝつ〻切に感涙袖をちぐり
門前に老若男女系信群集のゝる殊勝ゝべゝぐ和侍に
沈めゝく紅白の蓮花ゝゝに開けゝゝ為ひちつ心中に為ひ
けゝゝ我ゝぐゝ蓮にいぐゝゝゝ先ゝ和ゝゝゝゝやゝ池の
中ゝぐゝと花入一茎の蓮に見をかくゝぐホト折れて

べうべうと又一花に咲をかくれバホキトおれくゝ池の中へどぶと倒れ
しゆ系諸の男女見とゞめそれ気遣ひよ狂人よとはるる
おどれ寺中ゆゝ大勢かけ出衆く池の中より引あげさそ
其方ハ何者ぞと問べきれば私ハ安芸にあり[redacted]ハ赤
[redacted]村庄屋義ちつとゝあめふてゝとふるひくゝ上げきべ皆く
大に笑ひ和ハ抵分ゆゝんとゝ衆くゝ衆くゝ[redacted]べ牛深
の寺町なりけり

其十四

河内谷屋の宮社内樫の大老樹あり一本両俣に別生る十
余丈一股ハ[redacted]年大風あり其一股を折る内拷て空し

ゆえに見を村木の商人に売ちく賣人ゝ成欲を去れども
数十百人見をゝ〳〵価を定むるとて不能皆題〳〵て去る
義に予が隣家の某なるもの其折ゝる一股の枝を買一価
十三金をもつくゝて其枝切口径一丈九尺五寸空の所径
九尺杣木挽ホ總て十余人皆其室完に住居〳〵てもつく
数日見とゝ〳〵るに其ゝろしき所六間の大義和数十枝そ
中なる所板巾五六尺に〳〵く数百枝其下なる所大青百
七十二あり誠に未曽有の大樹とゝ〳〵べ〳〵柏崎椿川辺神の
社の木又見ゝ次ぐ周六丈二尺五寸高田滝寺温泉のゝ人
大円元年開基大樫樹三根あり又ゝれに次ぐ見ゝ大樹古根の
見舎門堂あり

めでたきなる事 桂ヶ関貝付挾川の下 桂の右根経六間余河内谷天狗杉根の経二間二尺青龍の観音 我費田村の西 杉の右根

まさきれに次ぐべ

北越奇談巻之五終